

## 私の個性

福島市立岳陽中学校 3年 半澤 未織

私は、幼い頃から重度の聴覚障がいを持っている。人工内耳を着用すれば物音や相手の声は聞こえるが、相手が話している内容を聞き取ることが難しい。

私は、小学校、中学校共に通常学級に在籍している。高校も通常学級を受験するつもりだ。通常学級では健聴者と同じように授業を受けることができ、学校の行事にも参加できて充実した生活を送ることが出来ている。だが、学校生活や日常生活で不便なこともある。その例として一つ挙げる。今はコロナ禍でマスクの着用を義務化されている為、読話（唇の動きから話の内容を読み取ること）ができない。その為、先生が話している内容を半分も理解できないことが多いことだ。また、英語のリスニング問題で解答できなかつたり、友達の会話を上手く聞き取れず愛想笑いをよくしてしまう。話を聞き返そうとしても、「相手に嫌な顔をされたらどうしよう」と思ってしまい、なかなか聞き返すことが出来ない。被害妄想をしがちな私の性格が原因でもあるが、いつも不便に感じてしまう。そんな自分を変えるために日々努力している。

いつも行っている塾の授業で話を聞き取れず、「どうしよう」と悩んでいた。だが私は受験生だ。分からないままにしておくわけにはいけないと思い、勇気を出して先生に言った。

「ここが聞き取れなかったので、もう一度説明してほしいです。」

先生は私が発言したことに驚いていたが、直ぐさま笑顔になり、優しく説明してくれた。私はこの瞬間に新しい自分に変わったと感じた。集団で授業を受けている為、自分が質問したとき周りの目にはどう見えるのか不安だったが、周りの生徒は気にすることなく授業を進めていた。先生は、

「分からないことがあるのは誰でも一緒。気にすることなく聞いていいんだよ。他の人と大きなハンデがあるのに必死についていく姿を見ていると私も頑張ろうと思えるよ。」

とってくださった。その言葉に私は救われた。そのことがあってから、遠慮なく聞き取れなかったことを質問できるようになった。そのおかげか、定期テストの点数は二十点以上上がり、志望校合格ラインも少しずつだが近づいてきた。今までの自分だったらちょっとしたことにも不安を感じていて、志望校合

格の夢は今よりももっと遠ざかっていたと思う。聴覚障がいも理由に逃げるのではなく、自分だけが持っている武器や個性として多くの困難に立ち向かおうと思えた。

私は、聞こえているふりをしようとか、障がいを理由に越えることが難しそうな高い壁を避けようとは思わなくなった。ありのままの自分でいようと、前向きに生活できるようになった。私は周りの人が差し伸べてくれた手を握って立ち直ってきたことが多いが、時には自分から助けを求めてみようと思う。耳が聞こえないから出来ないことは沢山ある。これがありのままの私であり、私に足りないことは家族や友達が補ってくれると吹っ切れることが出来るようになった。

また、自分が障がいを持っているからこそ出来る気遣いもある。少し前、街中で白杖をついた視覚障がいを持っている女性を見かけた。信号を渡ろうとしていたが、その信号は音が鳴らない信号で、渡るタイミングが分からないようだった。周りの歩行者はそのことに気付いているはずなのに誰も声を掛けようとはしない。私はもどかしさを覚え、声を掛け、一緒に信号を渡った。そのとき女性が「ありがとう」と言ってくださった。私はその一言だけでとても嬉しい気持ちになった。障がいを持っている私でも出来ることは数えきることが出来ない位、沢山あると感じた。

私は障がいがある、ないに関わらず全ての人が平等に生活出来る環境を作っていきたい。そんな私の夢は言語聴覚士だ。私と同じように耳が聞こえない人、構音障がいや吃音などで発音することが困難に感じている人を、私の経験をもとに救って笑顔にしてあげたい。健聴者の方々に聴覚障がいについて理解してもらうために、様々な取り組みを行いたい。難聴者の心のよりどころであり、健聴者と難聴者の架け橋になれるような言語聴覚士になりたい。